審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　鄭　昶　源

本論文は、開港以降の韓国に新たに伝来した西洋の宗教であるキリスト教が、韓国の近代建築の発展に果たした役割や影響を歴史的に明らかにしたものである。

韓国におけるキリスト教は、アジアにおいては異例的に、伝来直後から急成長を遂げており、現在に至るまで国の中心的な宗教として発展している。韓国近代建築の形成に関する研究は、近年、その成果の蓄積が著しいが、主に植民地時代の日本との関係に焦点があてられており、より多角的な視点で論じられてこなかったという問題がある。そうした中、本研究はキリスト教によるミッション建築の通史的な考察を行うことによって、韓国近代建築の形成におけるもう一つの発展過程を提示することを試みている。

その際、ミッション事業によって完成された建築物の編年的な羅列という通史研究にとどまることなく、宣教政策や各建築物誕生の背景などの発展過程における影響を明確化したことが本論文の特徴である。特に、当時の宣教師による様々な報告書などの一次資料をふんだんに活用することによって、建築の主体であった宣教師による建築活動が究明できたことは、本論文の価値をより高いものとしている。

論文は、まず韓国に各宣教団体が定着する過程を都市的観点から明らかにしている。韓国に定着するアメリカを中心とした六つの宗派は、活動の重複を避けるため、宣教地域を分割する政策をとっていたが、各々宣教活動の拠点として半島の主な都市30ヶ所にミッション・ステーションを設置したことで、その都市はミッション建築の中心地として成長することになる。また、各々の拠点都市に宣教活動の中心地として設置されたミッション・コンパウンドは、そのすべてが衛生的な理由などから意図的に都心周辺の丘の上に開拓されたことなど、都市におけるその立地的分析とともに開拓過程における特徴を明らかにしている。

次に、既存の韓国地域にあった韓屋建築を継承した韓屋ミッション建築と宣教師の入国に伴って現れる韓洋折衷ミッション建築の誕生経緯について論じている。韓国で最初に完成された教会建築を皮切りに、ほとんどの教会が韓屋建築で計画されたことは、既存の民家建築様式で教会を建てることを進めた「ネビウス宣教政策」の影響であったことを指摘している。また、韓屋教会が誕生する一方で、既存の韓屋建築に現れた変化は、宣教師の住宅から始まった。アメリカン・スタイルの内部に韓国式の外観の韓洋折衷様式の住宅は、韓国への同化を意識した宣教師らの試みであったこ

とを究明している。特に、韓洋折衷ミッション建築の誕生としての開拓宣教師の活動や開拓宣教師から影響を受けた韓国人大工による同建築様式の全国各地への拡散過程を明らかにした体系的な論述は、既存の地域建築文化の近代化・西洋化への漸次的変容を明らかにするという興味深い論考となっている。

続いて、韓洋折衷ミッション建築とともに洋風ミッション建築も誕生するが、それはメソジスト教が早い段階から同建築に積極的であったことを指摘している。同時に、これらの洋風建築は、建築を専門にする建築宣教師や海外の建築家が中枢であったこと、またその施工活動は中国人ビルダーが掌握したことを明らかにしており、韓国近代建築が日本人を中心に展開されたという定見に対して、それと異なる成長過程があったことを指摘している。

一方、日本の代表的なミッション建築家であるヴォーリズは、韓国においても多数の作品を残している。そこで、ヴォーリズが行った韓国訪問の全17回を明らかにし、韓国訪問に伴う建築活動、そして彼の影響までを深く掘り下げたことは、日韓ミッション建築の関係史を深めるものとして貴重である。

最後に、韓国ミッション建築が持つ総体的な特徴として、韓屋建築の増改築に始まり、韓洋折衷建築の過程を辿りながら洋風建築へと発展した明確な発展過程を体系的に論じたこと、さらに、その発展過程を現象学的な分析にとどまることなく、韓国に定着していた宗派ごとに比較分析を行ったことで、各宗派による異なる建築的特徴を明らかにし、またそこには各宗派による異なる建築思想が起因していたことまでを明らかにしたことは、極めて意義深いものであることを強調したい。

以上、韓国ミッション建築の形成に影響を与えた宣教政策や建築思想をはじめ、宣教師や建築家などの建築活動の主体を中心に、豊富な一次資料をもとに質の高い分析と考察がなされた本論文は、その形成過程の全体像を明らかにしており、西洋から紹介・導入された異文化が東洋という地域建築文化に与えた影響に関する今後の究明における新しい展望を拓いたものと言えるよう。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。